



著者プロフィール

甲斐由起子（かい・ゆきこ）

昭和39年 2月25日横浜生まれ。

昭和59年 井本農一に師事。

平成7年 「常磐松句会」を経て、「祥」に入会。
「祥」新人賞。

平成11年 「天為」入会。有馬朗人に師事。

平成14年 第一句集『春の潮』（ふらんす堂）刊行。

平成18年 評論集『近代俳句の光彩』（角川書店）刊行。
「天為」新人賞。

現在「祥」・「天為」同人。俳人協会幹事。

国際俳句交流協会会員。俳文学会会員。

〈句集『雪華』より転載〉〈2012年7月14日時点〉

『雪 華』

（自選15句）

甲斐由起子

人形の目の一重なる余寒かな
夢醒めてなほ夢の世や西行忌
遅き日の遠くが見えてゐたりけり
絵日傘をひらけば顔に花の影
うつしみの色さしきたり羽化の蟬
すぐそと一言はれて速し草いきれ
白桃に頬を濡らして母おもふ
ひとところ強く日のさす秋の嶺
小鳥来るかさと言してもう一羽
熊出ると話すあひだも星流る
病み抜いて垢も浮き来ぬ柚子湯かな
未明の雪死者と生者とひとつ間に
生きてをらば齢八十寒の菊
雛出して今日といふ日の終はりけり
人影の岸を離るる忘れ雪